

011 野平祐治家文書と目録作成について

1 本史料「野平祐治家文書」は、江戸末期の須坂藩の動向や明治初期の須坂町の新しい政治の流れを研究する者にとっては、たいへん貴重な史料です。とりわけ、堀直虎の祐筆として側近にあった野平野平（のだいら・やへい）の手記は、直虎の諫死の原因や背景を研究する上で欠かせない史料です。

ところが、多くの市民は「野平家文書」の存在は知りつつも、実物を目にするにはほとんどありませんでした。研究者の中には、ぜひ見たいという要望が強くあります。

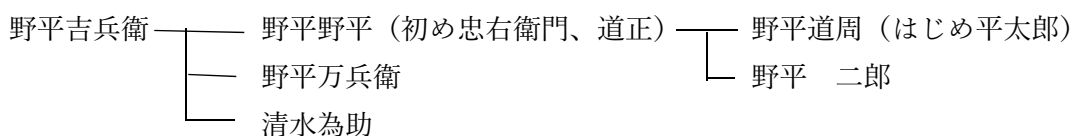
そんな中、2008年（平成20年）5月、須坂市誌編さん室の発足を機会に「野平家文書」の保管者滝沢和久さんに閲覧をお願いしたところ、快く応じていただくことができました。

ここに、「野平家文書」の全容をはっきりさせることができました。

写真	5点
記録・手記	20点
人事・褒美など	13点
手紙	4点
絵図・地図	5点
金銭関係（貸借など）	9点
その他	24点
	計 80点

以上の史料は野平野平（道正）・野平道周（平太郎）親子に関わるものがほとんどです。これを永年保存するために、家別番号を011とし目録化しました。

2 野平野平・道周親子について



野平（道正）が須坂藩に仕えたのは嘉永4年（1851）の頃のことです。内願し地足軽格1人扶持を与えられました。嘉永6年の異国船来航の翌年、足軽急出府の申し付けにも内願し、精励の結果、高俵10俵1人扶持となり、安政6年（1859）6月には、御徒士席御宛行俵17俵2人扶持を与えられました。

万延元年（1860）には、江戸勤番となり、文久元年（1861）の直虎の改革には、参画していたといわれています。改革後昇進し、さらに文久三年に直虎が幕府の大番頭になると、野平は、御祐筆御徒士兼帯となり、江戸定府を命じられ、妻子を伴って出府し、直虎の側近として仕えています。子の道周も、慶応2年（1866）には、俵15俵を加増されました。

直虎の自刃後、藩論は朝廷の側に立つか幕府側に立つか激しく対立しました。藩の存続を願う朝廷派が勢力を示す中で、野平親子は須坂に帰り、席格下げとなりました。史料「記録」（No.8）の中で、直虎自刃の理由に触れると共に、藩論に敗れて切腹させられて藩士2人を忠義の士として讃え、2人の死に対する世評に憤怒し、人面狗と批判しています。祐筆とい

う立場で、直虎の気持ちを最もよく知っていた人物のひとりである野平の手記をどのようにとらえるか興味につきないところです。

最後の藩主堀直明にも親子で仕え、子の道周は、その後北越戦争に参加し、論功として糶5俵を与えられ、褒美として金7両を賜っています。その後、野平は第40区の副戸長を勤め、道周は上高井郡書記、課長を勤め、さらに須坂三等郵便電信局長を勤めています。